
新領域「グローバル関係学」 *Newsletter 2018. Apr. (No.2)*

† 領域代表よりご挨拶 †

千葉大学 グローバル関係融合研究センター センター長 酒井啓子

文部科学省科学研究費助成事業「新学術領域研究」『グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立 社会科学の確立』（「グローバル関係学」）は、2018年度の今年、事業開始から3年目を迎えます。5年間の研究事業も、すでに折返し地点を迎えました。

世界各地での紛争、対立が、情報や思想、モノやカネ、人の移動のグローバル化などの影響を受け、複雑に絡み合う現代のグローバルな危機。この「新しいグローバルな危機」に対応するには、分野横断的な包括的視座をもって分析した研究が必要だと訴えて、「グローバル関係学」は始まりました。わたしたちは、現代のグローバル社会の問題を読み解くには、主体内部の関係性や、さまざまなレベル、規模の主体が相互に関係しあう、その関係性の変化と相互連関性を見ていくことが必要だと、考えています。

発足からの2年間、本新領域研究が力点をおいて進めてきたのは、「グローバル関係学」に関わる理論や方法論をどのように確立するか、という点です。そのために、総勢30名を超える5つの計画研究、さらに公募研究に集まった研究者たちを一室に集めて、「グローバル関係学」とは何か、「グローバル関係学」を確立するためにはどうすればよいかを、政治学、経済学、国際関係、文化人類学、歴史学、文学、社会学、農学、情報学と、さまざまな分野で議論を重ねてきました。その試みは、本新領域研究のウェブサイトになんて新しく設置した「グローバル関係学・オンラインペーパーシリーズ」のページに、成果を掲載しています。

「グローバル関係学」が研究事業として、もうひとつ力点を置いているのが、計画研究ごとの研究を超えて、領域全体の討議を行う場です。全員参加の全体研究会では、毎回4～5人の研究者がさまざまな専門分野から研究報告を行っています。そこは、自らの研究の枠を超えて新しいことを学ぶ、領域を超えて議論することの楽しみが溢れており、毎回熱気のある討議が繰り返されました。

若手研究者を集めて開催された「若手研究者報告会」でも、東京はもちろん関西地域、北海道、さらにはロンドンから、多数の若手研究者が関心を示してくれました。領域外の若手研究者の報告に、領域内の研究代表者、分担者が真剣勝負でコメントを返す。学問とは、このように若者を惹きつけ、若者の弾力的な思考にベテランが刺激されるものなのだあと、改めて感銘を受けました。

日本国内だけではありません。シンガポール国立大学との共催を受け、シンガポールで開催した国際会議は、「グローバルな危機」の代表例とも言うべき移民・難民問題を取り上げ、日本やシンガポールのみならずカナダ、イタリアなど各国からの研究者、実務家が結集した、こちらも熱のこもった討議が展開されました。

この熱を、どう今後につなげていくか。土台はできました。これからはその土台の上で、いかに研究者がそれぞれ、「グローバル関係学」を展開するかです。それは、領域内の研究者だけではありません。今年は公募研究の募集もあります。「グローバル関係学」の視点を取り入れて分析してみよう、という研究者のみなさん、大歓迎です。

2017年度の主要な活動（領域全体）

<グローバル関係学構築の試み>

総括班は、グローバル関係学を新学術領域として確立することを目的とし、分担者や公募研究者および領域外の若手研究者にグローバル関係学の視座を理解しその分析枠組みをもとに研究を展開するよう推進することに力点をおいて、活動を行っています。2017年4月には、研究活動拠点として千葉大学に「グローバル関係融合研究センター」を立ち上げ、研究拠点として活動しています。

2017年度には、領域代表の酒井、計画研究 A01 代表の松永、計画研究 B02 分担者の久保が全体研究会や国内外の研究シンポジウムなどで、それぞれがグローバル関係学の試論を報告しました。そこでは、各界からコメントを受けて学理のブラッシュアップに努めています。その結果、1) グローバル関係学が、なんらかの出来事や変化、表出する現象をとりあげてそこで交錯するさまざまな関係性を分析することに焦点を絞る、2) グローバル関係学がとらえる関係は単なる主体と主体の間の単線的／一方向的関係ではなく、さまざまな側面で複合的・複層的な関係性を分析する、との2点が共通合意として確認されました。

こうしたグローバル関係学に関する認識を深め、研究者間の相互理解を深めるために、領域内の研究者が一堂に会する全体研究会を年間6回開催し、計28人の代表者、分担者、公募研究者が自らの研究報告を行いました。

さらに、計画研究の枠にとらわれず、領域全体の研究交流を推進するため、3つの計画研究横断プロジェクトを立ち上げました。第1は、グローバル関係学が課題とする「喫緊のグローバルな危機」のひとつと捉えられる移民・難民問題に関するプロジェクトであり、第2はグローバル関係学のための研究方法を模索する方法論プロジェクト、第3は他者認識、パーセプションの問題を扱うプロジェクトです(以下をご覧ください)。<http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/cross-sectional/index.html>

本新領域事業が力を入れていることのひとつに、若手研究者の育成があります。2017年度に実施した第一回若手研究者報告会では、公募研究者を含め24件の報告希望があり、うち22件の報告を2日間にわたり、早稲田大学にて行いました。報告者のなかには、日本で学ぶ留学生や英サセックス大学在学中の研究者の参加もあり、各報告には討論者からのコメントもなされ、活発な議論が交わされました。この報告会は有意義だったと参加者に好評でしたので、今後も継続させますが、今年度は京都大学東南アジア地域研究研究所の機動的協力を得て、京都大学で実施する予定です。今秋には公募研究の第二弾募集を行うため、より多くの応募を促す積極的な広報を行います。

<国際活動の推進>

総括班主導で確立したグローバル関係学の学理を国際的にも発信していくため、国際活動支援班と協働しながら、海外での国際会議を毎年実施することとしています。2017年度はシンガポール国立大学中東研究所と共催で同大学にて国際シンポジウム The Global Refugee Crisis を実施、最初のパネルでグローバル関係学の骨子を提示して、海外の研究者に発信、幅広い反応を得ました。会議の様子は、シンガポール大学中東研究所のウェブサイト動画配信されています(こちらからご覧ください)。

http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/conventions/convention20180105_06.html#main

2018年度には、同様の国際会議をセルビアで実施する他(12月)、世界政治学会(7月、オーストラリア)、世界社会科学フォーラム(9月、福岡)でグローバル関係学に関するパネルを設けます。

2017年度中には千葉大学グローバル関係融合研究センターがメコン機構(バンコク)、ムスタンシリア大学(バグダード)と交流協定を結ぶなど、海外の研究機関との協力体制を確立しました。

2017年度の主要な活動（各計画研究）

計画研究 A01「国家と制度：固定化された関係性」

計画研究 A01 では、主体・制度としての国家が、地域やグローバルなレベルにおける諸変動の影響、さらに移民・難民の到来や宗教・宗派・民族間の対立など越境的事象の拡散や浸透に抗しながら、いかにその領域主権国家性を維持しているかという観点から、実証的な調査研究を行い、「グローバル関係学」に資することを目指しています。

2017年度は、国内外のダイナミズムを含めた調査研究の主要対象国として、イラン、トルコ、エジプト、パキスタン、インドネシアに焦点を当てる一方、特定の制度的構築のあり方ゆえに顕在化している、移民・難民の移動や受入れに関わるガバナンスや国際レジームの構築に関する多国間連携の動態、また移民・難民の長期的滞在が引き起こすホスト社会における統合・非統合の問題についても、パレスチナ人およびシリア難民に関してヨルダンとスウェーデンで調査研究を実施しました。ヨルダンとインドネシアでは、現地の調査機関の協力を得て、独自の世論調査を実施しました。

加えて、研究領域全体に関わる「グローバル関係学」の理論的視座の構築のための全体集会、および移民・難民に関する計画研究横断プロジェクトに積極的に参加し、シンガポール国立大学での難民問題に関する国際会議に、理論的議論および個別実証研究の報告者として、大学院生レベルの若手研究者および海外から参加した研究協力者を含む5名が参加しました。

さらに、計画研究独自で、イランとトルコにおける近代国家の歴史的構築過程を、上からの制度的な世俗化、それに対抗する下からの政治・国家の宗教化、さらにそれらを受けた再世俗化の模索の観点から、比較実証研究する国際研究集会を企画し、2017年11月に在バイルート（レバノン）の中東研究日本センター（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）において、トルコ、オーストラリア、イギリスから5名の研究者を招聘し、2日間に亘り実施しました。また計画研究 B01 と

共催で開催したワークショップ「サッカーとグローバル関係学」では、トルコの事例に関して分担者が報告を行いました。2018年2月には、バイルートでの国際研究集会のフォローアップ研究会として、東京において「トルコの社会と政治—グローバル関係学の観点から」を開催しました。

2018年度は、新たにミャンマーを研究対象国に加え、世論調査を実施し、政軍関係や多数派と少数派との軋轢の観点から、ミャンマーとエジプトやインドネシアとの比較研究にも乗り出す予定です。

計画研究 A02「政治経済的地域統合」

計画研究 A02 では、環太平洋パートナーシップ協定（TPP）や東南アジア諸国連合（ASEAN）、湾岸協力理事会（GCC）、欧州連合（EU）などの地域統合の消長につき、その階層的複雑性に留意しながら研究を推進しています。ミクロ的（地域・産業レベル）、メソ的（国家レベル）な事象がよりマクロなレベルにおける地域統合の動向（例えば保護主義の台頭）に影響を与え、逆に大域（マクロ）的な状況が、下の階層における政治経済面での挙動にフィードバック効果をもたらしている点を事例とともに示そうと努力を行いました。

2017年5月には、セミナー「社会の幸福感を考える～東アジアの国々の事例から～」を開催し、社会レベルの幸福感（地域統合の研究に重要）、「多面的な自己」という視点が提起されました。2017年9月には、セミナー「南北統一の可能性はあるのか？～脱北者の人生と北朝鮮の経済・社会的状況に迫る！」を開催し、朝鮮半島の南北統一（広義の地域統合）に向けた展望をミクロ的市民レベルから感じ取ることができました。また同月にはシンポジウム「政治経済的地域統合～アジア太平洋、ヨーロッパ、中東の動向から～」を開催し、地域統合の現状と学理について討論しました。

2017年9月には研究会「ソシオン理論の概要と国際関係分析への適用可能性」も開催し、社会関

係を解明するための分析ツールであるソシオンの地域統合分析への適用可能性を見出しました。また10月には研究会「オートポイエーシス理論と国際関係」を開催し、地域統合という構造ありきではなく、階層間の関係性から結果として地域統合が形成される点を確認しました。

2018年1月には、同志社大学南シナ海研究センターと共催で国際シンポジウム「南シナ海問題と世界秩序の未来」を開催しました。分担研究者の鈴木（同志社大学）の尽力によりプリンストン大学のジョン・アイケンベリー教授および中国・日本の専門家を招聘し、南シナ海における領有権をめぐる国家間の対立につき世界的な政局に照らして討議がなされました。

これらの研究活動を踏まえて、共同の研究成果として、政治経済的な地域統合に関するブックレットを2冊出版しました。個別の研究活動および研究業績も積み重ねています。同時に、複数のメディア（テレビ、ラジオ、新聞および一般雑誌）への情報発信を行い、公的諸機関に情報提供も行いました。

計画研究 B01「規範とアイデンティティ：社会的紐帯とナショナリズムの間」

計画研究 B01 では、グローバル社会のさまざまな地域の共同体の社会意識、社会的紐帯に関わる調査・研究を行うことを主眼に置いています。

2017年度は、「記憶・表象・権威」をキーワードとし、主として1) 規範とアイデンティティの時間的な継承とグローバルな広がりを見る上で歴史的記憶を取り上げ、それがいかに地理的、時系列的に共有されるかを分析し、2) 映像、音楽、服装など非言語的な表象に現れる文化的、政治的、歴史的意味の共有と差異を地域間で比較し、3) 社会において権威がいかに確立されるのかを開発などの経済的要因や、宗派ネットワーク、ジェンダー、「見た目」などの文化的歴史的要因との関連で分析することに力点を置きました。そのため、複数の分担者によるワークショップやシンポジウムを実施しましたが、特別企画「共生を語ろう」（後

藤、小林による）、ワークショップ「サッカーとグローバル関係学」（福田、山本、酒井）、ワークショップ「装いと規範」（帯谷、後藤）がその代表例です。

これらの研究事業を通じて、本計画研究では住（移動する人々、生活空間）、衣（ヒジャーブや伝統衣装）、娯楽（スポーツ、映像芸術）といった日常的な行為、振舞いのなかに見られる規範やアイデンティティの変容を捉え、そこにいかに権威関係が表出するか、そうした日常的な記憶が社会運動など集合行為にいかに影響を与えているか、中東、中央アジア、中東欧、アフリカなどの事例を中心に比較研究を進めています。

そのために、それぞれが専門とする地域でフィールド調査を行い、佐川はエチオピア連邦民主共和国南部諸民族州でのフィールドワークを行い、帯谷はウズベキスタンで、故カリモフ初代大統領の神話化ならびにポスト・カリモフ期の社会規範とアイデンティティの変容に関する調査・資料収集を行いました。酒井はレバノン、ヨルダンにおけるイラク難民への聞き取り調査を行った他、バグダード大学など現地研究機関から研究者を招聘したり、国際ワークショップ「中東における宗派主義：宗派がいかに政治・紛争に動員されるか？」を実施して宗派アイデンティティの台頭原因を分析しました。一方、山本はシリア内戦を文学の視点から分析し、シリアのドキュメンタリー映画『カーキ色の記憶』の上映会とタンジュール監督のトークイベントを実施しました。

計画研究 B02「越境的非国家ネットワーク：国家破綻と紛争」

計画研究 B02 では、近年深刻な国際問題となっている紛争や内戦に着目し、それらの結果として起こる「国家破綻」の実態と、その権力の空白に生じる非国家主体（例えば、武装勢力や「未承認国家」など）とその越境的ネットワークの実態の分析を進めています。これは、主権国家の主権や領域性の存在を前提としながらも、それらに必ずしも縛られない人びとの営みや共同体認識を析出し、

グローバルな「関係性」のなかでその意義を捉え直す作業であると言えます。

2017年度は、主に次の3事業に注力しました。

第1に、「破綻国家」ないしは「ポスト破綻国家」における世論調査を実施しました。今年度実施したのは紛争の続くシリア、イラク、そしてボスニアの3つの国でしたが、政治的混乱のなかでの世論調査の実施は、それ自体が困難なことであり、貴重なデータを収集することができました。これらのデータについては、それぞれの研究分担者が個別の国や地域の文脈で分析を進めると同時に、その知見を持ち寄ることで国・地域横断的な共通点と相違点を明らかにしました。「国家破綻」は、そこで暮らす人びとの国家観を溶解・拡散させることにつながる一方で、元の国家や政治共同体の存在意義を再確認するモメントにもなることが浮き彫りになりました。

第2に、「破綻国家」の質的研究です。具体的には、その紛争の深刻さ、そして、国際安全保障上の深刻さに比して研究が進んでいないイエメンとソマリアに関して、主に現地語資料や国外に亡命／避難している市民への聞き取り調査により国家観の溶解・拡散の実態把握に努めました。ソマリアについては、次年度以降、ソマリランドでの世論調査の実施可能性も高まりつつあり、定量的研究との組み合わせによる方法論の刷新・開発につながるものと考えられます。

第3に、上記の取り組みを通じた「グローバル関係学」の学理確立のための試みです。研究会やワークショップの開催を通して国内研究者から様々な意見やアイデアを得ることはもちろんのこと、9月には英国から、12月にはイラクから研究者を招聘し、「国家破綻」や越境的ネットワークの実態やその分析枠組みについての議論を深めました。これらの成果発信は、計画研究 B02 だけでなく、この新学術領域研究「グローバル関係学」の内外の研究者に広く開かれたかたちで実施されており、今後もいっそう活発な議論がなされるものと期待しています。

計画研究 B03：文明と広域ネットワーク：生態圏から思想、経済、運動のグローバル化まで

計画研究 B03 は、国家間関係ではカバーできない、地球規模で共有される諸問題と諸現象が増加している現状を踏まえ、それらの動的展開過程を分野横断的に研究し、個々の社会の基層への影響を捉えつつ、グローバルな問題解決アプローチとグローバル・コモンズ創生の可能性を探ることを目的としています。とくに、主権国家と民主主義という現代国際政治において中心的とされてきた規範と対抗規範をめぐる、「文明の衝突」とも見える議論を整理した上で、そこに新たな規範を掲げて登場した市民レベルの広域ネットワークが、経済のグローバル化と情報技術ネットワークの発達と関わりながら、国家主体に代わりグローバル・リスクにいかに対応してきたのか、グローバル・コモンズ創生の可能性を含めて検証します。

2017年度は、計画研究 A02 との共催で、2018年2月に国際シンポジウム「メコン・コモンズからメコン共同体へ」を開催しました。メコンをフィールドとして、メコンの第一線で活躍する研究者等を招聘し、コモンズに必要な条件や要素を文理の垣根(歴史学、社会学、国際政治学、国際関係論、国際経済学、開発学、農業経済学、生物工学、地理学、公衆衛生学、工学、農学、土壌学など)を越えて議論しました。このシンポジウムを通じて当初の研究計画で掲げた移民、人権、環境・生態系、情報技術、農業・食料安全保障、疫病、国境を越えた経済活動、市民社会ネットワークを具体的に取り上げました。また、文理融合とコモンズ研究を発展させるために、メコン機構と学術協定(MOU)を締結し、学術研究連携を進めました。加えて、グローバル・コモンズ研究会を新たに立ち上げ、2017年6月に第一回研究会を開催し、コモンズ概念について分担者全体で共有しました。2017年7月に第二回研究会を開催し、理系の視座を取り入れるために、宇宙デブリを専門とする外部講師を招き、コモンズについて議論しました。

個別の調査研究も着実に進め、代表者がベトナム・カンボジア・タイを中心にコモンズに関する

現地調査を実施しました。分担者は、イギリス・オランダ・イタリアで外交資料の調査、ヨーロッパにおけるムスリム移民への排外的感情・差別行為の増加の問題の調査、ザンビアの難民キャンプにおける農業活動・資源配分の実態調査、トルコ・フランス・スウェーデンのムスリム同胞団関係者に対する調査、グローバルな先住民運動の展開に関する研究の整理、経済のグローバル化と模倣品に関する研究をそれぞれ進めました。

* * *

公募研究

2017年度は、前年度に採択された7つの公募研究が開始され、個別の研究が進められるとともに

に、総括班主催の全体研究会に参加して、計画研究との調整、研究協力、意見交換を行いました。

特に、岩下は第四回全体研究会で「グローバル関係学」学理確立のための報告に対する討論を行った他、張、ヘーゼルハウス、水野、宮地は若手研究者報告会で中間報告を行い、公募研究が順調に進められていることを示しました。また辻上は、シンガポール国際会議への準備報告会となる全体研究会で、自身の研究報告を行いました。これらの公募研究採択者の研究報告は、特に領域外の若手研究者の間で、「グローバル関係学」への関心を高める上で、大きな刺激となりました。

2017年度会議等開催記録

年月	日	会議名	会場	主催
2017年 4月	22日	第1回総括班会議・第1回全体研究会	立命館大学 東京キャンパス	総括班・国際活動支援班
4月	23日	移民・難民・多文化共生をめぐる関係学構築プロジェクト第1回研究会	東京外国語大学 本郷サテライト	計画研究横断プロジェクト
4月	20, 27日	若手育成研究会1、2	立命館大学	B02
5月	11日	若手育成研究会3	立命館大学	B02
5月	23日	セミナー「社会の幸福感を考える～東アジアの国々の事例から～」	千葉大学 西千葉キャンパス	A02、B01 (共)
6月	1日	グローバル関係融合研究センターキックオフ・シンポジウム「グローバル世界と日本の現在と未来を考える」(基調講演：渡辺雅隆朝日新聞社代表取締役社長)	千葉大学西千葉キャンパス けやき会館	総括班
6月	2日	移民・難民・多文化共生をめぐる関係学構築プロジェクト第2回研究会	東京外国語大学 本郷サテライト	計画研究横断プロジェクト
6月	10日	第2回総括班会議・第2回全体研究会	東京外国語大学 本郷サテライト	総括班・国際活動支援班
6月	13日	講演会「最近のイラク・クルド情勢—報道の現場から」(新田義貴元 NHK 記者/ディレクター)	千葉大学 西千葉	B01
6月	17日	シンポジウム「《文学》からシリアを考える—独裁、“内戦”、そして希望—」	東京大学 東洋文化研究所	B01 (共)
6月	26日	研究会「ポスト資本主義時代の新たなパラダイムとしてのイスラーム経済の可能性と課題」	立命館大学衣笠キャンパス	B02

6月	28日	講演会「シリアにおける「本当の戦争」絶望の中心地からみえるもの」(松本太駐シリア臨時代理大使)	立命館大学衣笠キャンパス	B02 (共)
6月	3日	第1回グローバル・コモンズ研究会	千葉大学 西千葉	B03
7月	1日	第1回国際活動支援班会議・第3回全体研究会	東京外国語大学 本郷サテライト	総括班・国際活動支援班
7月	12日	第2回グローバル・コモンズ研究会「グローバルな問題としての宇宙デブリ：地球低軌道における実験的観点から」	千葉大学 西千葉キャンパス	B03
7月	23日	第3回総括班会議・第4回全体研究会	東京外国語大学 本郷サテライト	総括班・国際活動支援班
7月	28日	講演会“Political Parties and Movements in the Post-Arab Uprisings in the Middle East” (カタール大学 Larbi Sadiki 教授)	上智大学 四谷キャンパス	B01
7月	28日	セミナー「日中韓の統合と日本のビジネス環境」	千葉大学 西千葉	A02
7月	29日	国際ワークショップ「現代におけるムスリム知識人と伝統、知識、アイデンティティ」	東京大学 東洋文化研究所	B01
8月	25日	2017年 ASEAN 統合ミャンマー部会・研究座談会	千葉大学 西千葉	A02
8月	31日	特別企画「共生を語ろうー世界の経験と発想から」	東京大学 東洋文化研究所	B01 (共)
9月	1日	崩壊国家の世論調査プロジェクト B02 研究会合	バイルート	B02
9月	7日	第4回総括班会議	東京外国語大学 本郷サテライト	総括班・国際活動支援班
9月	16日	研究会「ソシオン理論の概要と国際関係分析への適用可能性」	龍谷大学 深草学舎	A02 (共)
9月	21日	講演会“From Oil Rents to Inclusive Growth:Lessons from the MENA Region” (ロンドン大学 SOAS Hassan Hakimian 教授)	東京大学 東洋文化研究所	A01、B02
9月	21日	国際ワークショップ「中東における宗派主義：宗派がいかに関与・紛争に動員されるか？」	東京大学 東洋文化研究所	B01
9月	28日	セミナー「南北統一の可能性はあるのか？ ～脱北者の人生と北朝鮮の経済・社会的状況に迫る！」	千葉大学 西千葉	A02
9月	29日	シンポジウム「政治経済的地域統合 ～アジア太平洋、ヨーロッパ、中東の動向から～」	千葉大学 西千葉	A02
9月	30日	第5回総括班会議・全体研究会	東京外国語大学 本郷サテライト	総括班・国際活動支援班
10月	13日	シリア映画『カーキ色の記憶』上映会+監督トークイベント	早稲田大学 戸山キャンパス	B01 (共)
10月	15日	ワークショップ「サッカーとグローバル関係学」	成城大学	A01、B01
10月	19、26日	若手育成研究会 4、5	立命館大学	B02

10月	28日	研究会「オートポイエーシス理論と国際関係」	龍谷大学 深草学舎	A02 (共)
11月	22日	国際シンポジウム「コミュニティの幸福と公正」	千葉大学 西千葉	A02 (共)
11月	23日	公開講座「コミュニティの幸福と公正」	千葉大学 西千葉	A02 (共)
11月	26、27日	ラウンドテーブル"Imagining Resecularization in Iran and Turkey: A Comparative-Historical and Theoretical Inquiry"	ベイルート中東研究 日本センター	A01
12月	3日	第6回全体研究会（シンガポール国際シンポジウム事前発表会）	東京外国語大学 本郷 サテライト	総括班・国際活動支援班
12月	4日	シンポジウム「IS後のイラークルディスターン住民投票と選挙に向けた政治変動」	東京大学 東洋文化研究所	B01、B02
2018年 1月	5、6日	国際シンポジウム“The Global Refugee Crisis: Mobile People under State Protection or Exploitation?”	シンガポール国立大学 中東研究所（シンガポール）	総括班・国際活動支援班
1月	27日	国際シンポジウム「南シナ海問題と世界秩序の未来」	同志社大学 今出川	A02 (共)
2月	3、4日	若手研究者報告会	早稲田大学 早稲田	総括班
2月	4日	第6回総括班・国際活動支援班合同会議	早稲田大学 早稲田	総括班・国際活動支援班
2月	10日	ワークショップ「装いと規範」	京都大学 東南アジア 地域研究研究所	B01
2月	11日	国際シンポジウム「『メコン・コモンズ』から『メコン共同体』へ」	千葉大学 西千葉	B03、A02
2月	24日	研究会 “Turkish Society and Politics: from a "Relational Studies on Global Crisis" Perspective”	東京外国語大学 本郷 サテライト	A01、B01 (共)
2月	28日	講演会 “The Marja'iyya of Najaf in the Age of Iran's Vali-ye Faqih (Guardian-Jurist): The Dynamics of a Transnational Competition”（アーフス大学 Elvire Corboz 准教授）	早稲田大学 早稲田	B01、B02 (共)
3月	2日	第7回総括班・国際活動支援班合同会議	東京外国語大学 本郷 サテライト	総括班・国際活動支援班
3月	17日	『『グローバル関係学』確立のための新たな方法論探究プロジェクト』第1回研究会	立命館大学東京キャンパス	計画研究横断プロジェクト

2018年4月28日発行
編集責任・発行者 酒井啓子
発行所 千葉大学グローバル関係融合科学センター
<http://www.chiba-u.ac.jp/crsgc/>
263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33 千葉大学
Tel. 043-290-2334
e-mail: gblcrss@chiba-u.jp
インターネットホームページ : <http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/index.html>